

二〇一四年度日本学術振興会二国間共同研究ハンガリーとの共同研究

## ワークショップ「東中欧・バルカン地域の 人・モノの移動に関する考察」の開催

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 山本 明代

昨年度から二年間の計画で実施している日本学術振興会二国間共同研究のワークショップを二〇一四年五月一七日と一八日に開催した。今年は共同研究メンバーである、本学と大学間協定を結んでいるペーチ大学とハンガリー科学アカデミーの研究者が五月一六日から二九日まで日本に滞在し、名古屋と東京、仙台、札幌の各地でワークショップ、講演会、シンポジウムなどを開催した。ここでは今年度の活動のなかでも本学で行ったワークショップについて紹介したい。その他の活動については今年度の成果報告書で紹介する予定である。

ワークショップの第一日目は、七人のメンバーが発表を行った。パプ・ノルベルト氏による第一報告は「ハンガリーのムスリム」と題するものだった。カルパ

チア盆地への到着以前にもハンガリー人はムスリムと接触し、かなりの数のムスリムが集団に加わっていた。ムスリム共同体はキリスト教会に抵抗していたが、十四世紀までに完全に同化した。オスマン帝国占領下で南スラヴ人、ヴラフ、アルバニア人が移住し、ハンガリー人も少数ながら改宗した。一七世紀末の解放後、ムスリムの多くは国を後にするか、ハンガリー社会に同化した。一八七八年以降、ボスニア人とトルコ人が移住した。一九一六年にムスリムは合法的地位を得て、一九三一年にブダペシュトに信徒組織を確立する。一九八〇年末、宗教組織が再建され、体制転換後、移住者や改宗者も増加した。

山崎信一氏は、二〇世紀におけるブルゲンラント・クロアチア人アイデンティティの形成と変容」と題する発表を行った。ブルゲンラント・クロアチア人は、一五世紀から一六世紀に戦争を逃れて、現在のクロアチアとボスニアから移住した人々を祖先とし、固有のアイデンティティを形成した。一九五五年にマイノリティの権利を付与され、一九八七年には、ブルゲンラント・クロアチア語が第二公用語として承認された。彼らのアイデンティティの発展には、オーストリア当局との関係、多数派のドイツ話者との関係、ブルゲンラントの地域主義との関係に加えて、「本国」たるクロアチアとの関係、および現代にオーストリアに移住したクロアチア人との関係が影響を与えている。

シヨクチェヴィチ・デーネシュ氏は「ハンガリーにおけるクロアチア系エスニック集団―移民と起源をめぐる小史」と題する発表を行った。二〇一一年の国勢調査によると、二万七千人のエスニック・クロアチア人がおり、クロアチア語使用者も一万七千人を数える。歴史上の異なる時期に様々なクロアチア系集団が到着した。オスマン軍の侵攻から逃れるために、あるいはオスマン支配下のハンガリーに、一七世紀末にも大量の移民があった。ハンガリーには少なくとも七つのクロアチア系の下位集団が存在する。グラディステエ（ブルゲンラント）、ポムルスキ（ムル）、ポドラヴィナ、シヨカートツ、ブニェヴァーツ、ボスニア系、ラーツ（ドナウ川の）、ダルマチア系クロアチア人などである。出身地の違いから異なる方言が話されている。ユーゴ内戦以降に約五万人の難民が到着した。キタニチ・マーテー氏の発表は、「シゲトヴァールトウルベーク―一七世紀から一八世紀のハンガリー語、ドイツ語、ラテン語の史料から見るスルターンの埋葬地」と題するものだった。二〇一三年初頭、スルターンの墓とそれを取り囲む要塞の位置を史料調査に基づき、突き止めることに成功した。トウルベーク要塞は一八世紀の史料では「トルコ人の塹壕」と呼ばれており、シゲトヴァール近郊に

位置していた。その場所は、古くはイエズス会が聖母マリアの墓所としていたが、フランシスコ会の所有に移り、その後、世俗の所領の一部となり、ブドウ園、庭園、果樹園、トウモロコシ畑となった。調査によると、スルターンの埋葬地はトゥルベークのブドウ園の丘にあったと推測できる。

秋山晋吾氏は、「一八世紀トランシルヴァニア・アルヴィンツのディアスポラ集団―再洗礼派とブルガリア人」と題する発表を行った。一八世紀のトランシルヴァニアは、三つの国制上のナティオとルーミアニア人からなる社会として理解されている。しかし、これらのナティオ体制の周縁部に、さまざまな出自と特権を有した外来集団が存在していた。一七一五年までトランシルヴァニア侯の直轄地アルヴィンツは、複数の外来集団（再洗礼派とブルガリア人）が特権を得て定住した。これらの集団は、ある意味で特異な集団として認識されており、享受する特権と由緒に依拠して他の集団と区別するという自意識を有していた。そして、共同体として自称および他称されることが、差異化の指標として極めて重要な意味をもった。レメーニ・ペーテル氏の発表は、

「コソヴォー分解か、あるいは統合か」と題するものだった。コソヴォーの内的境界には、自治体ごとの公的境界、セルビア人が多数派を占める北部コソヴォーと国内の他の領域を分ける半公的境界、エスニック集団を基盤とする新たな自治体の境界がある。二〇〇八年にアルバニア地域のマイノリティ市民を統合する新たな自治体の境界が創られた。これはトップダウン式の国家領域の分割だった。北部コソヴォーではボトム・アップ式で行政的自治権を獲得し、半公的な自治体を形成している。外的境界のなかでも両側に同じエスニック集団が存在するところでは、越境がより容易であり、道路などのインフラ整備を通して国境を越えた国民形成が進行している。山本明代は、「民族浄化研究の現状と課題」と題し、二〇一四年に翻訳書を刊行したノーマン・M・ナイマークの著書を手がかりに民族浄化研究について発表した。ナイマークは民族浄化概念を再考し、ジェノサイド概念との相違点を示した。そしてこの概念が近代国家の最も進んだ発展過程の産物であること、二十世紀に起こった民族浄化には相互の関連性があることを指摘している。ナイマーク

は、民族浄化の重要な特徴の一つがマイノリティを排除するため彼らに恐怖を与えることであると述べている。この点は現代のナショナリズムやマイノリティ問題を考えるうえで示唆を与えている。

第二日目には、三名の発表と総合討論を行った。木村真氏は、「二〇世紀前半のブルガリアと周辺諸国間の住民交換」と題する発表を行った。住民交換は、二十世紀のバルカン諸国で初めて導入された。一九一三年にコンスタンティノーブル平和条約によって、ブルガリアはオスマン帝国との間で、ブルガリア系正教徒とトルコ系ムスリムの住民交換を行う条約を締結した。第一次世界大戦後のヌイイ条約の結果、ギリシャとの間で自発的な住民交換が実施された。ギリシャとトルコ間で自発的な住民交換が行われ、第二次世界大戦中にもギリシャやトルコへの移住が起こった。一九四〇年のクライオヴァ条約では、ルーミアニアとの間で住民交換を行った。これらの住民交換は、ブルガリアが国民国家建設のために行った民族言語的（宗教的）人口工学の一部だった。ピーロー・ラーズロー氏は、「ユーゴスラヴィアの統合とマケ

ドニア―一九一八―三九年」と題する発表を行った。一九一八年のセルビア人クワアチア人スロヴェニア人王国の建国後、数年間でユーゴスラヴィア国家の政治制度が確立した。マケドニアの命運は、バルカン戦争後のセルビア併合によって決まった。戦前、マケドニアは経済的にも政治的にも南部、とくにテッサロニキとの関係が深かった。一九一九年以降にユーゴスラヴィア主義が鼓吹された。セルビア人は同化を試みたが、成功しなかった。諸機関や諸制度の統合はうまくいったが、社会経済的な相違をなくすることはできなかった。経済発展とともに近代化は進んだが、マケドニアはユーゴのなかで最も発展が遅れた地域として留まった。

百瀬亮司氏の発表は「ポスト・ユーゴスラヴィア社会における『多言語主義』マネジメント」と題するものだった。二〇一三年、クロアチアが欧州連合に加盟した年にヴコヴァル市では、ナシヨナル・マイノリティであるセルビア人の使用するキリル文字の公用文字への採用をめぐる論争が起こった。クロアチアでは、二〇〇二年一月に「ナシヨナル・マイノリティの諸権利に関する基本法」が

発効し、ナショナル・マイノリティの言語の公用語化の促進が図られた。二〇一一年の国勢調査の結果、ヴコヴァル市ではセルビア人が全体の三分の一を越えたため、クロアチア政府がヴコヴァルに二言語併存体制を導入した。それが退役軍人協会らの反発を招き、大規模なデモ集会が開かれた。この事例はEUのさらなる拡張に対する貴重な教訓を提供している。